

三浦半島エコミュージアム

かわら版

第2号

第3回フォーラムが開催されました！

平成14年11月30日、湘南国際村センターにおいて「三浦半島エコミュージアムフォーラム」が開催されました。K-FACEが平成12年度から4か年計画で行っている「三浦半島エコミュージアム研究事業」では毎年地域の市民活動の発表・交流など情報提供の場として、フォーラムを開催しています。

3回目のテーマは「地域の学びとエコミュージアム」。学校の週休二日制が始まり、地域社会の役割が見直されるなかで、各地域の活動発表、分科会による討議、ワークショップから、自分たちの地域について個々の考え、意見が出されました。

このかわら版では、分科会を中心に参加者や関係者の皆さんからコメントをいただきました。



展示コーナーでは各活動団体同士の交流もおこなわれた

もうひとつ別の視点

～エコミュージアムのコアの機能とは

柴田 敏隆 (三浦半島自然保護の会)

約120名の参加があった今回の三浦半島エコミュージアムフォーラム。

エコミュージアムに造詣が深い柴田敏隆さんに、大会実行委員会顧問として一歩引いた立場で参加いただいた。柴田さんの目には今回のフォーラムがどう映ったのだろうか…。率直な感想を述べていただいた。



今年で3回目を迎えたエコミュージアムのフォーラムは、ますます盛況を呈して、ご同慶の至りでありましたが、私はかねてから、疑問に思っていた点について、別の視点から捉え、問い質したいと、参加の基本姿勢をそこに置きたいと思いました。

私の視点というのは、極めてオーソドックスなもので、エコミュージアムという方にはコアとサテライトがあります。それを結ぶコリドーもあります。これはエコミュージアムの基本構造です。このいわば物理的図式的構造を、どう機能させるか？がエコミュージアムの本質的課題であるのに、今までの多くの発表は(末端の)サテライトに当たる部分の活動報告で終わっていたのではないのでしょうか。今回私が出た第4分科会ではその典型でした。

二つの活動報告は充実した中身の濃いものでしたが、一方は郷土の史跡探訪、一方は海上でのカヌーイング。

一方は同好の学習集団、一方は単身で自然に挑戦する「克己スポーツ」。まさに水と油的乖離である。これをエコミュージアムとして取り上げるとするには、どういう視点でどう結びつけたら良いのか。寄席の三題噺より難しいものです。

シンポの開催要項には、事例発表による話題提供から「エコミュージアムの視点から新しい取り組みについて(中略)参加者全員で話し合います～第4分科会指針」とありましたが、発表に時間をとり過ぎて、満足が得られるような議論はありませんでした。司会側でも、そういう方向へのコーディネートは無かった。ここがエコミュージアムの難しいところで、今までの分科会発表者の多くが、この壁を破っていません。そしてこれに関わるコアの立場と機能(特に動きかけ)が見えていませんでした。

でも「博物館だけがコアとは限らな

フォーラムのプログラム

全体会(発表)

- 「エコミュージアムと地域の学び」
- 「おおくすエコミュージアム」
- 「葉山エコミュージアム」
- 「すかっ子セミナー」

分科会・ワークショップ(議論)

- 地域の子どもの学び
- 学習活動の担い手と博物館
- 広域ネットワークと情報発信
- 観光・地場産業活性とまちづくり
- WS「エコミュージアムって何だろう」

成果発表会・交流会(共有・交流)

い」という鋭い指摘もありました。今回の他の分科会の報告を聞いても、私の疑念は払拭できませんでした。むしろ会場のロビーにパネル展示で発表された沢山の活動報告を、どうコーディネートし、あるいはファシリテートしたら、羅列的な総合でなく系統的統括的综合によるエコミュージアムとして機能させることができるのかを、みんなしてワイワイしながら行うワークショップを試みる方が、冒険の魅力に富むのではないのでしょうか。

いささか厳しい感想であります。私も実行委員会の側に所属する一人です。深い自責と自戒を込めた論旨で、他意ないところをご了承いただきたいと思えます。

判ったような判らないような、論旨は明確なのに具体的展開にはとりつく島もないようなのがエコミュージアムです。それだけに無限の魅力に曳かれるのもエコミュージアムであります。お互い頑張りましょう!

第1分科会では、地域の子どもの学びを学校だけではなく、地域自体を子ども達の学びの場にすることが議論されました。

子どもは地域のコーディネーター



明石 紀久男(遊悠楽舎)

わたしが「問題提起者」として参加する第1分科会のテーマは「地域の子どもの学び」。予定されている「ねらい」は「子どもたちの成長において地域のはたす役割が期待される」そこで「地域を子どもの“学び”の場」とし、「多様な地域資源を素材として活用し“遊び”や“学び”をどう実践していくか」というものでした。

まず において“子ども達の成長”とはどういうことを指すのでしょうか。大人達の期待に込めて“いい子”に生きることなのでしょうか。さらに“地域を子どもの“学び”の場”とするとき、誰が地域を子どもの学びの場にしようとしているのでしょうか。地域は学びの場なのでしょうか。“期待される成長像”にはたす、期待される地域の役割とは一体何なのでしょう。そして「多様な地域資源を素材」として誰が活用し“遊び”や“学び”を誰がどう実践していくのでしょうか。主体は誰なのか？これだけ期待され、取り組まれるということは、実は“地域”と呼ばれるものが、ぶつぶつに切れた関係だと証明できます。分科会の話し合いもぶつぶつ切れたものでした。問題提起者の発言から対話が生まれず、参加者の実践報告が羅列され、かかわりの重なった部分から核心

に向けて話が深まりません。参加者のかかわり合いが適度な距離の中に探り出せずにいました。それは提起された問題の中からA,B,C,いずれかに的を絞って話し合いをすすめるといった、その時その場にあった流れや空気の中で、共有できるかかわり合いを模索できなかったからです。コーディネーターとかファシリテーターといわれる、かかわりを調整する役割の存在も大切です。

現在地域のコーディネーターとは子どもではないかと思えます。子どもに何かを教えよう、やらせようと集まってくる頭デッカチの知識や、おとなという名の傲慢で不遜なデカイ面の面々をきちんとかかわらせ、同じ考えにさせ、知恵を生み出させてくれる存在は子どもです。「地域の子どもの学び」ではなく「地域は子どもに学ぶ」ではないでしょうか。

地域で子どもたちに何を学ばせるか、どう学ばせるかではなく、地域の子どもたちからわたしたちが何を学ぶかなのです。そう考え、実践できる地域こそが生きた地域、生きあえる、生かしあえる地域と言えるのだと思います。

第2分科会では、地域には博物館や市民グループなど、さまざまな学びの主体が存在していますが、その間をつないでいく必要性と現実的な難しさについて意見交換されました。



博物館と市民の理解に向けて

瀧端 真理子(追手門学院大学)

三浦半島エコミュージアムフォーラムに初めて参加させていただき、この第2分科会で繰り広げられた、博物館と市民のありようをめぐる議論を大変興味深く聞かせていただきました。

市立博物館とも連携した横須賀建築探偵団の活動を発表された富澤さん、私立ながら活発な有料の観察会やボランティア活動を取り入れている観音崎自然博物館の木村さんの発表を伺ったあと、参加者との討論が行われました。

市民サイドからの「市立博物館の学芸員が学究タイプで、市民との交流という視点がまだまだ不足しているのではないか」との指摘に対し、座長の林館長からは、「開館50周年に向けて運営懇話会を設け、館外からの批判に応えるよう努力し始め、市民グループとのつながりを模索している」とのお話がありました。「博物館同士の横の連携が市民には見えない」といった意見や、「市民が例えば展示に参加する時、具体的に経費は出るのか」といった突っ込んだ質問も出されました。

公立博物館の学芸員が、例えば市民グループ主催の観察会等に講師として出向くということは、現在の博物館の限られた人員の中での限界や、どのように公平性を保つかなど、難しい問題を抱えていると思います。第2分科会に参加された市民の皆さんからの「博物館は してくれない」という、行政へのやや依存的な発言と、「博物館はいつでも扉を開いています」という林館長の最後のまとめとのすれ違いに、三浦半島での難しい問題を感じるとともに、市民と博物館が共同して活動をつくり上げるという発想の転換が必要ではないか、と僣越ながら感じた次第です。

また、市民の学ぶ権利の保障として存在する公立博物館主催の無料行事と、そもそも有料でなければ成り立たない民間ベースの行事、この2種類の存在をどのように共存させていくのかは、今後広義のNPOベースで展開されていくエコミュージアムの活動でも、具体的展開にあたって考えていかなければならない問題だと思いました。

さまざまな刺激を与えてくださった、第2分科会関係者の皆様に感謝いたしております。

第3分科会では、活動団体は何のためにネットワークするのかに沿って、さまざまな議論が展開されました。

私が考える「広域ネットワークと情報発信」

松澤 利親

葉山芸術祭 <http://www.hayama-artfes.com/>
ArtCafe(アートと社会を繋ぐマネジメント非営利活動)
<http://members.jcom.home.ne.jp/artcafehome/>

第3分科会のテーマは「広域ネットワークと情報発信」。参加者は何を期待し、何に興味を持って集まっていたのか？ 分科会担当実行委員としてこの分科会開始直前に私はそう思いました。

私は自らの団体活動目的を常に確認しています。そうすると現在の問題、将来の問題が見えやすくなります。目的が明確ならばそれが達成できない理由も分かりやすくなります。

大抵の場合エコミュージアムに関わるような任意団体は、その活動資源、ヒト・モノ・カネ・ジョウホウが不足しています。これは活動する上で大きな問題です。この不足する資源を補うには他に協力を求めるのが手っ取り早いのですがしかし、手伝ってもらえばかりでは関係は築けません。こちらも出来ることはお手伝いする、これが広がると広域

ネットワークになると考えています。しかしそれは単なる地理的なものではなく、世代間の場合や異なる分野の活動、そしてインターネットによるグローバルな協力関係も含まれます。

もう一つ、他と協力関係を築くには自ら何者であるか、どんな目的で、どのような活動を行っているかPRしなければなりません。それが情報発信だと思います。それではそれを具体的にどう実践しているのか？手法として何が有効なのか？今回実行委員として、そんな議論が出来ると予想したのですが、物事は自分の思ったようにはいきません。だが、それで得られるものもあります。

これからもこうしたテーマを議論する場作りをK-FACEに期待しています。



第4分科会では、地域と豊かな自然を守り、産業を活性化して行くには、地域の視点、地域内での人や資金の循環などの重要性について議論されました。

住民が魅力を感じるまちづくり

江水 是仁(横浜国立大学)

私が第4分科会に参加して率直に思ったのが、「これほど都心から近い距離にあるにもかかわらず、三浦半島は海にも山にも非常に恵まれている地域である」ということでした。辻井善彌氏と山口浩也氏のお話では、その恵まれている環境を活かし、まずは地元住民を巻き込んでそのことを知ってもらうのか、それが他の地域とどこが違うのか、そして住民がこの地域に魅力を感じられるようなまちづくりするにはどうすればいいのか、ということ、現場に携わっている方々からの「ナマ」の声を聞くことができました。

今後は地元住民だけでなく、横浜や東京といった都市

部の住民を引きつけるような広報活動、市域・町域を越えた広域をフィールドとし、連携を図っていくこと、そしてこの地域の魅力を住民自身が研究・学習して、子ども達がこの地域の担い手を育てていくような活動ができると、この分科会のテーマがより実りのあるものとなるのではないかと、思います。その手段としてエコミュージアム活動は、とても実践的である、と思いました。

私も東京都内に住んでいますが、私自身、これほど近いところで充実した活動をしている地域があるということを知りませんでした。

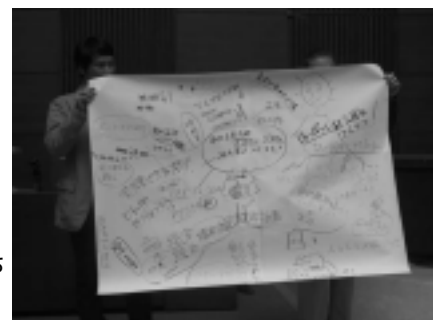
ワークショップ「エコミュージアムってなんだろう？」に参加して

広崎 勉(K-FACE)

ワークショップではERIC国際理解教育センターの渡辺正幸氏の進行で、参加者を2つのグループに分け、それぞれ「エコミュージアムと聞いて思い浮かぶもの」「エコミュージアムであるもの、ないもの」を紙に書き出しました。最後にまとめとして、全員で「自分たちが考えるエコミュージアムを一

つの紙に書き出しあいました。話合うというよりも一つのものをみんなで作り上げていくという感覚があったのではないのでしょうか。

参加者全員でまとめた「自分たちがエコミュージアムと思うもの」



フォーラムを振り返って

柳田 純(K-FACE企画担当)

今年もおかげさまで盛況にフォーラムを開催する事ができ、参加者、講師、実行委員の皆様、大変ありがとうございました。このフォーラムを通して感じたさまざまな課題から今後の展望を少し述べたいと思います。

今年の全体会では、三浦半島内のエコミュージアム活動、「おおくすエコミュージアム」「葉山エコミュージアム」「すかつ子セミナー」からの発表をしていただきました。それぞれ住民が地域に魅力を感じ、それを次世代の子ども達や市民に伝えていこうという意識が共通して語られていた部分だと思えます。しかし、三浦半島全体でエコミュージアムを眺望してみたときに、このような地域ごとの魅力的な活動があるのですが、柴田氏が指摘されたように、それらをどうコーディネートして結びつけることができるか、コアの役割が明確になっていません。

エコミュージアムにとってネットワークとは、このようにいろいろな立場の人が関わり合い、自分たちの地域に対するそれぞれの想いの表現の場、つながりの場です。そしてコアの機能としては地域の活動をコーディネートし、統合させていく地域活動の中心、働きかけ、活動支援などの役割を果たします。従って、コアとはエコミュージアムの全機能を担う中枢ではな

く、数多くの自立した活動組織が、地域に応じた自由な発想のもとで活動する中で、その形態が見えてくるものです。

ネットワークをしていくためには、行政や市民、学校と地域、大人と子ども、地域と地域、自然と人間、さまざまな活動主体がお互いに目標や情報を共有し、何のために、何処とネットワークすれば良いのか考え、共通のビジョンをつくっていく必要があります。例えば三浦半島ならば、市民グループと博物館や学校を中心とした子どものための学習ネットワーク、学習活動や地場産業や観光を通して地域を活性化していくエコツーリズムのようなネットワークも考えられるのではないのでしょうか。

今後のK-FACEは、以上ような課題に焦点を絞って、皆さんと一緒に現実的なエコミュージアムのあり方を考えていきます。またネットワークづくりを支援するため、情報ネットワークのツールとして、この「かわら版」やインターネットの「三浦半島エコミュージアムホームページ」を開設しました。また地域の学習プログラムをつくるコーディネータを育成するために「エコミュージアム活動&交流ワークショップ」を開催します。今後皆さんの活動や地域の情報をいただきながら引き続き取り組んでいきますので、どうぞご期待下さい。

K-FACE

三浦半島エコミュージアムかわら版
第2号
2003年1月31日発行

かながわ学術研究交流財団

〒240 0198 神奈川県三浦郡葉山町
上山口1560 39 湘南国際村センター内

電話 046 855 1821

Fax 046 858 1210

Email eco@k-face.org

<http://k-face.org/eco/index.html>

<後記>

「小説を長距離走とするなら、作詞は短距離走」と言った作家がいた。多くの方に原稿を依頼した今回はさしずめ徒競走だろうか？皆さまご協力ありがとうございました。(A.K)

エコミュージアムインフォメーション

募集

「三浦半島エコミュージアム市民の部屋」に参加・出展してみませんか？

(場所：湘南国際村センター)

5月3日(土)、4日(日)、5日(月・祝)

「三浦半島エコミュージアム市民の部屋」に参加する市民グループを募集しています。活動成果を発表したり、ワークショップを開催してみませんか？

[問合せ]TEL046-855-1821 / FAX046-858-1210

担当：柳田・清水まで E-mail : eco@k-face.org

もうご覧になりましたか？

K-FACEエコ・ホームページ

「三浦半島エコミュージアムの旅」!

K-FACEが提案する「三浦半島エコミュージアム」のホームページがリリースされました。もうご覧いただけましたか？地域の活動や情報の発信だけでなく交流も目指したホームページです。見るだけではなく知っている地域の情報を書き込んで、参加者になってください。いますぐアクセス!!

<http://k-face.org/eco/index.html>